

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 6 月 1 9 日現在

機関番号：1 2 1 0 1

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：1 6 K 1 7 3 9 6

研究課題名（和文）保健室における養護実践の変遷とその諸相-創造的实践から画一的実践へ-

研究課題名（英文）The evolution and diverse aspects of nursing practice in the health room

研究代表者

竹下 智美（TAKESHITA, Tomomi）

茨城大学・教育学部・講師

研究者番号：9 0 7 3 5 1 9 3

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1930年代～1970年における保健室実践の諸相を明らかにすることを目的とし研究を行った。本研究では、学校看護婦、養護訓導、養護教諭の免許状取得状況とそのヴァリエーションが明らかになった。1930年代～1950年代にかけての職制運動を経験した養護教諭の実践は、「画一的実践」が拡大する一方で、保健室と養護教諭（学校看護婦）の特質を生かした「創造的实践」も少なからず展開されていた。さらに、1960年代以降には、養護教諭の自主的サークルが発達し、自らの実践のあり方を多面的に議論し、職務の幅より深さを追求する様子が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、養護教員史をこれまでの制度史を越えて、個々の養護教諭の苦悩や考えを実践の中から捉え、養護教員史の特徴を構造的に描くことができた。戦中から戦後にかけての養護教員の量的拡大と職制運動の展開とともに「政治化された画一的実践」が拡大する一方で、子どもと向きあいつつ創造的な養護実践を展開し続け、養護とは何かを追求してきた養護教諭の姿が明らかになった。このことは、今日の養護教諭のアンビバレントな立場、態度を解明するために有意義なものになると考える。

研究成果の概要（英文）：As the first task to clarify various aspects of practice in the health room during the 1930s-1950s, this study reveals the status of license acquisition of nurse, nursing guidance, school nurse in addition to their variations. It suggests that the practice of school nurses during this period was developed with a mixture of “uniform practice” and “creative practice”. Furthermore, it became clear that from the 1960s onwards voluntary clubs of school nurses expanded, the ideal way of individual practice has been discussed from multiple aspects, and the focus of work duties shifted from the breadth to the depth.

研究分野：養護学

キーワード：学校衛生 衛生室 養護実践

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1．研究開始当初の背景

これまでの養護教諭の史的研究は、杉浦守邦『養護教員の歴史』（東山書房、1974）や近藤真庸『養護教諭成立史の研究』（大修館書店、2003）によって行われている。両研究は、主として学校看護婦が出現した1900年代から1941（昭和16）年に新たな教育職員として養護訓導が誕生するまでの制度上の整理にとどまり、本研究が課題とする実践史からのアプローチは、皆無である。一方、すぎむらなおみの『養護教諭の社会学』（名古屋大学出版会、2014）による職制運動の整理は、本課題である保健室実践の史的展開を構造的にとらえる上で示唆的な研究である。

そこで、本研究課題に取り組むにあたって、第一に、学校看護婦、養護訓導、養護教諭の免許状取得状況とそのヴァリエーションについて確認する必要がある。養護教諭免許状は、看護師免許と連動しながらデザインされた教育職員免許状の一つであったために、多様な出自が存在した。この出自の多様性が創造的な実践を生起させる素地を形成していたとも考えられる。

第二に、養護教諭は、戦後、四年制の高等教育レベルに引き上げられた教員養成とは異なり、県に附設された一年制（または二年制）の養護教諭養成所や看護免許取得者によって補われていた。このことが、後に養護教諭が受けたとされる教員間差別、そして、これと関係して職制運動へ発展したとされる。制度上も、1947（昭和22）年の学校教育法および同施行規則では、養護教諭養成についての養成機関の規程がなく、後に国立養護教諭養成所設置法といった別法を整備しての養成となった。このことから、他の教員養成と比較すると、大学における養成が整備されるまで、30年の遅れをとっていたことになる。よって、実践の質にも影響を及ぼしたことが予測される。

第三に、以上のように、出自の多様性と1970年代まで未完であった養護教諭養成が抱えた問題によって続いた職制運動は、政治活動派と実践活動派に分派し、それぞれが別の活動へと歩み出している。前者は、学校内での経験を強く意識しながら、養護教諭免許状取得の整備・充実とこれまでに学校の中で低位に位置づけられてきた身分の向上を政治的に目指した。一方で、後者は、単なる身分保証とその向上を主張するのではなく、実践の場における、子どもへのまなざしを強調しつつ、自らのしごとを探求した。

以上のように、戦後の養護教諭実践の詳細を明らかにすることは、両派の考え方の違いや実践の内実を捨象して、単に職制運動としてとらえられてきたこれまでの研究を乗り越え、アクチュアルな養護教諭成立史を明らかにする上でも欠かせない研究といえる。今日に至って、職制運動は養成機関の拡充・向上と職務の確立とともに落ち着いたものの、実践レベルでは、画一的でプログラム化された養護実践が広く顕在化しており、実践史が物語ってきた意義を今一度検討の遡上にのせるため、本研究をデザインした。

2．研究の目的

本研究は、1930年代から1960年代における保健室における養護実践の諸相を明らかにすることを目的とする。具体的検討課題は、以下の三点である。（1）学校看護婦から養護訓導、そして戦後の養護教諭誕生に至って展開された養護実践の展開過程に着目し、（2）職制運動が展開される中で、時代が「養護教員に求めた職務」と「養護教員が追求した職務」を明らかにする。その上で、（3）戦前・戦中・戦後を通じて、曖昧とされる職務の狭間で、自らの仕事（機能）を問い続け、実践のあり方を模索し続けた養護教諭の実践の史的意味について検討する。

3．研究の方法

これまで明らかにされていなかった学校看護婦、養護訓導、養護教諭の各時代における免許状取得状況と各学校への配置の推移、出自のヴァリエーションを確認し、戦前戦中の学校看護婦養成、ならびに養護訓導養成について養成機関別免許状取得割合を明らかにしつつ、出自の多様性と未完成な養成の下、職務の明確化を求め職制運動を展開する中で、どのような養護実践が展開されたのかを戦前・戦中に活躍した養護教員の実践記録より実践の中に顕在化する考え方を読み解き養護の本質について考察を深める。

4．研究成果

本研究では、1920年代～1960年代にかけての学校看護婦、養護訓導、養護教諭の免許状取得状況とそのヴァリエーションが明らかになった。養護教諭免許状は、看護師免許と連動しながらデザインされた教育職員免許状の一つとして存在し、看護、教育、その他の学際系、さらに戦前・戦中からの試験検定、無試験検定による免許状取得者等、多様な出自として存在した。この出自の多様性がヴァリエーションある実践を生起させる素地を形成していた。

1920年代～1930年代にかけての学校看護婦は、このような出自の多様性の中で存在し、その専門職意識は、必ずしも高くはなかった。しかしながら、職務を遂行する中で、一人ひとりの子どもに丁寧に向き合う実践が見られ、その眼差しもまた、身体のみならず、内面にも向けられ、子どもを個性をもち生長する存在として捉え、教育の対象としての子ども観を形成していった。

1940年代の学校看護婦の実践は、相談的対応の機会が増えてくる。その対応は、訓導としての教育的関わりというよりは、むしろ、衛生室という十分な空間と十分な時間を持つ養護訓導によって、自然な関わりの中で展開されていく。子どものつたなく、数少ない言葉に耳を傾け、子どもの内面や生活、経験を理解し、子どものニーズを的確に把握し対応がなされるようになる。また、その対応には、身体を媒介とする行為や「見守る」など非行為も含む非言語的なコミュニケーションが多くみられた。これら対応は、子どもに安心感を与え、学校看護婦もまた子どもに対する愛情や希望を持つきっかけを得るなど、今日的な養護教諭の相談的対応の基盤を形成していた。

一方、養護教諭養成については1947(昭和22)年の学校教育法および同施行規則には、養成機関の規程がなく、後に国立養護教諭養成所設置法といった別法を整備して養成された。そのため、戦後の養護教諭養成は他の教諭養成に遅れをとり、しかも1年課程の養成所で養成された養護教諭の質は必ずしも高くはなかったため、一般教員間でも差別問題は、後を絶たず、その実践にも影響を与えていた。教員組織の外部者として位置づけられ、相手にされない状況から、徐々に専門家としての関わりを持ちながら展開された実践は、健康教育を中心とした教育実践が中心的なものになっていった。

このような中、1960年代以降、全国各地に養護教諭サークルが発足し、戦中・戦後を通じて、曖昧な職務の狭間で苦しんできた養護教諭らが集い、自らの実践のあり方を多面的に議論し、職務の幅より深さを追求する様子が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹下智美	4. 巻 53号
2. 論文標題 昭和初期学校における健康相談の実態 学校看護婦(養護訓導)の相談的対応の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 淑徳大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀧澤利行、七木田文彦、竹下智美	4. 巻 24
2. 論文標題 養護実践にみる教育保健機能の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育保健学会年報	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 竹下智美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 16
3. 書名 学校保健の動向 平成30年度版「学校保健関連年表 - 附戦後学校保健関係書籍年表 - 」(1945 - 2018)『学校保健の動向平成30年度版』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----